R7 楡木小学校　学校通信
No.12

なりたい自分になる！

In 楡木サラダボウル

令和７年６月２０日
文責　余宮

空は雨模様。なんだか心までじめじめ…じゃなくて、きらきらひかる水しぶきがまぶしい季節ですね。

楡木サラダボウルの視点その１　個性は見出すもの

ちょっと前の朝、登校途中のきらさん（仮名）と出会いました。あいさつもそこそこに、道路に茂る雑草をしきりに触っています。「ほら、見てて…」と、種らしい場所を触ると、なんと種が爆ぜたのです！多分、音はなっていなかったんだろうけれど、心の中でポンっと音がなりました。きらさんも、いつの間にか集まっていたお友達も笑顔でいっぱいになりました。そして、今までは単なる雑草としてしか目に映っていなかったその植物（調べたところ「カタバミ」だと思われます）が、特別な「わたしの大切な『はねくさ』さん」に変わった瞬間でした。（「はねくさ」とは、多分、種が爆ぜるその目の前の様子から、子どもたちが命名した名前です。まさに固有名詞性を帯びた特別な植物になったということだと思います。）

個性って、こんな風に生まれるんだと思います。

NHK 朝ドラのモデルにもなった、植物学者の牧野富太郎先生が述べた「雑草という草はない」という言葉を思い出しました。その言葉は、次のように続いたとのこと。

> 「きみ、世の中に〝雑草〟という草は無い。どんな草にだって、ちゃんと名前がついている。わたしは雑木林（ぞうきばやし）という言葉がキライだ。松、杉、楢（なら）、楓（かえで）、櫟（くぬぎ）―みんなそれぞれ固有名詞が付いている。それを世の多くのひとびとが〝雑草〟だの〝雑木林〟だのと無神経な呼び方をする。もしきみが、〝雑兵〟と呼ばれたら、いい気がするか。人間にはそれぞれ固有の姓名がちゃんとあるはず。ひとを呼ぶばあいには、正しくフルネームできちんと呼んであげるのが礼儀というものじゃないかね」

ここに、個性の本質が宿っていると、私は思います。

人それぞれ個性があり、もちろんそれを「発揮する（できる）」人は、とても素敵です。ただ、現実に目を向けてみると、個性は発揮というより「見出される」と表現した方がよいのではないか。個性を発揮しようとすればするほど、そのよさが見えなくなったりかすんだりするもの。逆に、なりたい自分になるために、必死で努力を重ねるその端々に、その人ならではの個性がほとばしる。意図して自分らしさを見せようとしない自然体の方が、肩肘張って自分らしさを誇張するより、自分らしさがきらりと光る。

そんなもんじゃないかな。

そして、個性を「見出すもの」ととらえた場合、むしろ個性をもつ人よりも、その個性を見出すことができた周りの人こそが、とても重要だと思います。

その意味では、子どもたちはとても見出し上手。小さな違いが気になり、つい足を止める。「ねえねえ、この草、何て名前なの」なんていう質問は日常茶飯事で、残念ながら忙しい大人は、これもつい「なんだろうね」ならばまだいいか。ひどいときには「知らん。雑草だろう」と無下にすることもしばしば。反省しきりです。

期せずして、先週からにれのき人権旬間でした。一人ひとりのお友達のよさに気づけるとともに、その人ならではの個性を見出せる楡木っ子になってほしい。とりわけ、たくさんの願いのこもった一人ひとりの名前を大切にする礼儀を身につけた人になってほしい。このことは、楡木サラダボウルの大切な視点なんじゃないかと、私は思います。